

夢をかなえ外交官に 防衛駐在官として世界を舞台に活躍

防衛駐在官として米国へ

防衛省 航空幕僚監部で航空自衛隊の隊務運営を担われている丹波篠山市出身の中里悠花さん。今夏から、防衛駐在官として3年間、米国ワシントンD.C.にある在アメリカ合衆国日本国大使館に赴任されます。

防衛駐在官とは、防衛省から外務省に出向した自衛官のことをいい、外務事務官として諸外国にある日本大使館などで、防衛に関する事務に従事します。

今回、米国への赴任が決まり、中里さんは「とてもワクワクしている



防衛省 航空幕僚監部1等空佐
中里 悠花さん
(丹波篠山市出身)

ます」と話されます。「もともと、小学生の時に外交官になりたいという夢を描いていました。でも、自衛隊に入り、外交官は無理だなあと思っていましたが、防衛駐在官は外交官の資格をもっていますので、夢がかない、とてもうれしいです。また、防衛駐在官になるなら絶対に米国の駐在官と想っていましたので、米国で仕事ができることは、とても誇りに思います」と満面の笑みで話されました。

平和と安全のために

中里さんが赴任する米国は、「防

衛駐在官の華ともいわれるところで、軍事交流に特に力が入れられており、現在6人が駐在しています。この防衛駐在官の大きな役割は、赴任国で軍事や安全保障に関する情報を収集することです。米国には約180の国から、駐在官が派遣されています。そこで、彼らとの交流を通じて情報の収集を行うほか、米国との訓練や研修などの実施に向けた調整を行っています。

今回の赴任には、配偶者同行休業制度を利用して、同じ航空自衛官のご主人も同行される中里さん。

故郷・自衛官への思い

世界を舞台に活躍する中里さんは、丹波篠山市今田町の出身。中学生の時に大阪から今田町に移住されました。「家から中学校までは片道7キロの山道。毎日、自転車通学したことで、体も鍛えられ、足も速くなり、体力もつきました。自衛官としての素地が丹波篠山で身に付いたことは間違いありません」と当時を振り返られます。

また、「当時は丹波篠山の風景が、ジブリ映画『となりのトトロ』にでてくる風景とよく似ているなあと思っていて、ホッとするような風景に安らぎを感じていました。ですから、丹波篠山で過ごした時間は、楽しかった思い出しかありません」と故郷への思いを話されました。

高校卒業後は、陸・海・空各自衛隊の幹部自衛官となる方を養成する防衛大学校に進学し、自衛官の道に進まれた中里さん。最初は、



兵器管制官という、日本の領空を監視し、侵入してくる航空機を発見、識別する仕事に就かれました。「兵器管制官という専門性の高い仕事の後は、学校の教官もやりましたし、司令部組織で幕僚という勤務もし、防衛駐在官にもなりました。自衛官の仕事は、職種も仕事の内容も実に多様で、とてもやりがいがあります」と魅力を話されます。

最後に、自衛官として心掛けていることを伺うと、「とにかく迷ったら行動あるのみ。先を考え過ぎて恐れるのではなく、自分が少しでも興味をもったら、まずそこに足を踏み入れてみたほうがよいと思います。そうするときっと道が開けると思います」と、その思いを語られました。

甲冑づくりに取り組み約30年 篠山城大書院に15領寄贈

ときもとてるお 時本昭男さん(小枕)

手作り甲冑作家の時本昭男さんが5月10日、市に甲冑15領(大人用12領、子ども用3領)を寄贈。以前に寄贈された6領と合わせ、21領が篠山城大書院に展示されました。もともと城めぐりが趣味で、そこで出合う甲冑を見ては「着てみたいなあ」「欲しいなあ」と思いながらも、それを実現するのは難しく、それなら自分で制作してみようと、有名武将の甲冑写真や資料を基に、甲冑づくりを始められました。

材料は主に塩化ビニール板。型紙などにあわせて鎧の形に切り抜いたものに穴を開け、温めて曲げて形を作ります。そうしてできた部品を塗料で着色し、糸で編んでいきます。兜は、ヘルメットや特殊な厚紙を使用し、飾りは木を削って作ります。

「当初は1領仕上げるのに1年ほどかかりましたが、今では2カ月ほどで完成します」と時本さん。「完成したときの達成感は格別で、また次の武将のものが作りたくなります」と話されます。最後に、「多くの方に着用してもらって楽しんでほしいですし、歴史にも興味をもってほしいですね」と、笑顔で話されました。

